

17-8 英霊の声

1 構成 一から七の七段で成立している。行間を空けた箇所を1～節とする。

一 1

浅春のある一夕、私は木村先生の帰神の会に列席して、終生忘れることが出来ない感銘を受けた。

帰神の法を、幽斎の法と言うの、普通の神殿宮社で、祝詞供餞あって、神祇をいつきまつる「顕斎野法」に比して、霊を以て霊に対する法であるから、この名があるのである。

私が列席した会は、この帰神の他感法によるものであった。

石笛は鎮魂玉と同様、神界から授かるのが本来であるが、相当のものを尋ね出して用いてもよい。

神主は、川崎重男君が勤められたが、この二十三才の盲目の青年は、その任を果たすことのできる人であった。

一 2

その衣は、浅香三月初日に似合わぬ南風が吹き巡り、雨戸も鳴り、雨が窓を叩いた。

川崎君は、十八歳の時、事故によって両眼を失明したが、それ以来霊服をひらかれ、木村先生のおみちにきによって眼前にありありと現れる霊象に開眼し、第二の目をひらいた人である。

石笛の音は、心魂を揺るがすような神々しい響きを持っている。先生が吹き始められるが早いか、川崎君の面貌には顕著な変化が現れた。頬にあるかないかの微笑が刻まれ、突然、諸手で手拍子を打って、歌い始めた。

一 3

私は慄然として、隣に座っていたN氏と顔を見合わせた。

合唱は笛の音に縫われて、遠い潮騒のように高まり低まりつつ続いた。

終りに近づくほど、手拍子も勢い高く、声は弾んで石笛の音を圧するほどに朗々と、言い知れぬ怒りと嘆きを含んで歌った。

川崎君は激しく肩で息をして面を伏せ、息の音と石笛の音のみがもつれ合った。

木村先生は笛から口を離し、白布で笛の孔を拭っておられた。

二

ひとまず神は神あがり、休息の暇が与えられたように思われたので、今神下りましたのはいかなる神でしょうか、と先生に問うた。

木村先生はおもむろに口をひらかれ、

「いや、私は必ずしもそうは思いません。」と言われた。

いかなる神とも知れないが、その数が多いこと、高い神格は疑いがないこと、先行の神伝秘書中にも、

(略)

「今の世のことを語られても、必ずしも新しい神々とは言われぬ。今の世を汚れたりとしりたまうのは、何もかもお見通しだからである。」

木村先生は石笛を口から離され、

「いかなる神にましますか、答えたまえ。」と言われた。

これに答える川崎君の声も、ますらおの声になっていた。

「我らは裏切られた者たちの霊だ。」とその声は明瞭に言った。

私どもは慄然とした。

木村先生は重ねて問われた。

「何者が裏切ったのでありますか。」

「それと今言うははばかりがある。」

「今いずこに神集うてましますか。」

「所の名は言えぬ。月の海上であるとだけ答えよう。ここは我らの安息の場所だ。われらは裏切られた霊だからだ。」

「なにゆえ裏切られたもうたのでありますか。」

「おいおい語るところを聞くがよい。その軍服の胸は破れ、血に濡れている。今も血を流している。」

このとき私は、今宵の帰神が容易ならぬ自体を招いたのを覚った。

先生がすでに決意を以てこの荒魂を迎えようとされていることは、私にはよく分かっていた。

先生が、

「海上の神遊びのころをおきかせ下さい。」と問われると、

「神遊びか。」と霊の言葉には、自ら嘲っているとも聞こえる響きがこもっていた。

「この日本を巡る海には、血がへめぐっている。無限の若者の流した血が海の潮の核心をなしている。黒潮を血の色に変え、赤い潮あは唸り、叫び、猛き獣のごとくこの小さな島国の回りを彷徨し、悲しみに吠える姿を。」

今こそ我が本体を明かそう。われらは三十年前に米軍を起し、反乱の汚名を蒙って殺された者である。我らを忘れてはいまい。」

私はそこで初めて、この霊がかつて代々木の刑場で処刑された若い将校の霊であることを知った。

そして、恐れる神霊は、次のように神語りに語ったのである。

三 1

「われらには、死んで全てが分かった。我らは全てを言う資格がある。」

刑場へ赴く途中、一大尉が叫んだ言葉が胸に蘇る。

『皆死んだら血のついたまま、天皇陛下のところへ行くぞ。死んでも大君の天皇陛下のところへいくぞ。』

死んだわれらは天皇陛下の所へ行ったか？

大演習の黄塵のかなた、天皇旗のひらめく下に、白馬に跨られた大元帥陛下の御姿は、遠く小さく現人神のおん形として、われらが心に焼きつけられた。

大君は正しく理会したまい、受け入れたまうに違いない。

三 2

私どもは言葉もなかった。木村先生はやがて私どもの気持ちを察して、こう言われた。「今夜は思いがけぬ仕儀になり、私も川崎君もこれほどの神霊の重みに耐え得るかどうか危ぶまれる。

私は先生の気迫に打たれながらも、丈夫ではない盲目の川崎君の体を気遣ったが、先生もまた石笛をとって静かに唇へあてられた。

やがて再び、私は川崎君の口を通して、英雄の御霊が語るのを聞いた。

四

「そのとき陛下はおん年三十五におわしました。

われらが国体とは心と血のつながり、片恋のありえぬ恋敵の劇烈な喜びなのだ。

怪獣どもは焰を吐き、人肉を食い、あやしい唸り声を立てて徘徊しつつ、上御一人の警護を装うて、実は九重の奥に閉じ込め奉っていた。

われらはその怪獣どもを倒して、陛下をお救い申し上げたいと切に念じた。その時こ、そのときこそ、民も途端の苦しみから救われ、丘は後顧の憂いなく、勇んで国の守りに就くことが出来るであろう。

われらはついに義兵を挙げた。思いみよ。その雪の日に、わが歴史の奥底に潜む維新の力は、おん方と忠勇の若者との、稀なる対話を用意していた。

思いみよ。

そのとき瑞穂の国は荒蕪の地と化し、民は飢えに泣き、女兒は売られ、王土は死に満ちていた。国体は澄み渡り、国には至福が漲る筈だった。

思いみよ。

そのとき歴史の清らかなるものは、遍満する腐敗、老朽と欺瞞をうち破り、純血と熱血のみ、若さのみ、青春のみを通して、陛下と対語せんとのぞんだのだ。

われらはその指揮官だった。

そしてわれらは神謀りのままに動く神の兵士であった。

そこは一つの丘である。

われらは兵を率いて、奸賊を屠った血刀を掲げて立っている。

兵はみな肅然として、近づく栄光の勝利を待っている。

そのときだ。丘のふもとから只一騎、白馬の人がすすんでくるのは。それは人ではない。神である。勇武にして仁慈にましますわれらの頭首、大元帥陛下である。

陛下は馬をとどめ、軍靴の足もとに届く。

『謹んで申し上げます。君則の奸を切り、陛下の御命令をお待ちいたします。何卒御親政を以て、民草をお救い下さい。』

『御苦労である。今より、朕自ら政務をと小国の安泰をとるであろう』

『信を与え、軍の枢要の地位に就かせよう。朕が不明であった。皇軍は誠忠の士を必要としている。』

『いや、陛下、このままにお置きください。一組たりとも位を進めていただいては、身命を賭した維新の精神が汚れます。』

『そうか。その方たちこそ、まことの皇軍の兵士である。』

陛下は赤脅しの兵士たちに守られて雪の丘をお降りになる。その白馬のおん跡に従う我らこそ、神兵なのだ。

思いみよ。

ここにもう一つの絵図がある。

同じ丘。かなたから白雪の一部が、一騎の白馬の人、いや神なる人が疾駆してくる。

白馬は嘶き、乱れた足掻きを踏みしめて止まる。我らは棒刀の礼を以てこれをお迎えする。

我らは龍顔を仰ぎ、漲る御決意を仰いで、われらの志がついに大御心にはげしい焔を移しまいらせたのを知る。

『その方たちの志はよく分かった。』

その方たちの誠忠を嬉しく思う。

今日よりは朕の親政によって民草を安からしめ、必ず、その方たちの赤心を生かすであろう。心やすく死ね。その方たちはただちに死なねばならぬ。』

我らは「天皇陛下万歳！」を叫びつつ、手にした血刀をおのれの腹深く突き立てる。屠った奸臣の血はあ、われらの至純の血と交わり、天皇の赤子の血として、陛下の御馬前に浄化されるのだ。

大元帥陛下は白馬から下りたまひ、雪の上に立たれる。今や死なんとする肉体が顔れている。陛下は死にゆくわれらを、挙手の礼を以てお送りになる。

思いみよ。

龍顔のおん頬に、我らの死を悼むおん涙が雲間を貫く光に、数条のおん涙が！神がわれらの至誠に、御感あらせられるおん涙が！

われらの死は正しく至福の姿で訪れる。」

私は言葉を失った川崎君の顔が、紅潮した頬を失って、怒りの極の蒼白の色に移りゆくのをまざまざと見た。

彼の声には恍惚の響きはなく、暗い動揺が現れ、聞く者の心を引き裂いた。

「それはただの夢、唯の絵画、ただの幼さであった。」

すめろぎが神であらせられれば、神々が謀りたまうに神人对吾の至高の瞬間を、成就せずにおすましになれる筈もなかったからだ。救国の最後の機会を逸したまう筈もなかったからだ。

そんな陛下は、宮中をさすらい、ものを憚るような内奏に耳をすまされた。

民草の不安は、病菌のように人々の手運ばれて、宮廷風の不安に形を変えてすでに澱んで

いた。

陛下はただちにこう仰せられた。

『日本もロシヤのようになりましたね。』

このお言葉を洩れ承った獄中のわが同志が、いかに憤り、いかに嘆き、いかに血涙を流した子とか！

二月二十六日のその日、すでに陛下は、陸軍大臣の拝謁の際、

『今回のことは精神の如何を問わず、甚だ不本意なり、国体の精華を傷つくるものと認む。』と仰せられた。

二十七日には、陛下はこのように仰せられた。

『朕が臣を殺した青年将校を許せというのか。速やかに事態を收拾せよ。もしこれ以上ためらえば、朕自ら近衛師団を率いて鎮圧にあたるであろう。』

同じ日に、我らを自刃せしむるため、勅使の御差配を願い出た者には、

『自殺するならば勝手に自殺せよ。そのために勅使など出せぬ。』と仰せられた。

陛下のわれらへのおん憎しみは限りがなかった。佞臣どもはこのおん憎しみを背後に戴き、たちまちわれらを追い詰める策を立てた。

二十八日に出された奉勅命令は、途中で握り潰されてわれらの目に触れずこの無垢の抗命がたちまちわれらを天皇に対する反逆の罪に落とした。

陛下のおん憎しみは限りがなかった。軍のわれらの敵はこれに乗じて、たちまち暗黒裁判を用意し、われらの釈明はきかれることなく、はやばやと極刑が下された。

われらは十字架に縛され、額と心臓を撃ち貫いた銃弾は、叛徒の恥ずかしめに汚れていた。

この時大元帥陛下の率いたまう皇軍は亡び、この時、わが皇国の大義は崩れた。赤誠の士が叛徒となりし日、漢意のナチスカぶれの軍閥は、遮られるもののない戦争への道をひらいた。

われらは陛下が、かくも憎しみたもうたことをお咎めするすべとてない。

しかし叛逆の徒とは！反乱とは！国体を明らかにせんための義軍をば、反乱軍と呼ばせて死なしむる、その大御心に御仁慈は露ほどもなかりしあか。

(略)

歌うにつれて、声は一つ加わり、また一つ加わって、この会のはじめの帰神の時と同様それは雄々しいあまたの声の合唱になった。

川崎君の手拍子は、この歌の中程ではじまった。暗い拍子が、彼の薄い掌のうちから放たれ、歌のおわりに近づくに従って、拍子は重たくたゆげになり、ついに歌の果てると共に絶えた。

そのとき私は、急に川崎君の口から発せられた異様なひびきに嚇かされた。

それは慟哭としか言いようのない、激しい悲しみの叫びであった。畳に打ち付して、身をよじって泣き始めた。

川崎君の泣き声がようよう納まったとき、私は力が抜けるのを覚え、今宵の神事もこれで終わりであろう、この深い感銘は、記録に残して後世に伝えるべきである、と考えていた。

木村先生も同じ考えであったと見え、

「実に銘肝すべき夜である。神雲がこれほどの重大事を告げるために、われわれを選ぴたもうたことは、かえすがえすかたじけないことである。」と言われて、案内人のための、先に立ち上がられた。

先生は屈強な方であるが、その先生が立ち上がると同時に、めまいをおこされたように、柱にすがって、柱に額を押し当てて、めまいの静まるのを待つような動作をされた。

先生は元の座に戻られ、元のように坐っておられた。そして只今神変不思議のことがあった、とおっしゃられては、もはや会どころではなくなった。

『先ほど尊くも神下りましたのは、どちらの御魂にましますか。』とお伺いを立てた。

『それは問うな。われらのうちのどの人は柱でもよかろう。われらは志を同じくする者である。』

『われらに次いで、裏切られた霊である。第二に裏切られた霊である。』とどの一柱からともなく沈痛なお答があった。

川崎君は、泣き声をやめてから、前後不覚の眠りに沈んでいた。

先生は、石笛を取り上げられると、嘹亮
吹き鳴らされた。

六 1

「さきほど海上で拝した弟神のみたまにましますか？」と先生は、笛を吹きやめて、伺われた。

「そうだ。われらは戦の敗れんとするときに、神州最後の神風を起こさんとして、命を君国に捧げたものだ。」と朗々たるお答があった。

「何ゆえにおん魂もまた、裏切られたもうたのでありますか。」と先生は恐れげもなく問われた。

「それはわれらの物語を聞いてさとのがよい。

われらは比島のさる湾に、敵の機動部隊を発見して、われが指揮官つたる、爆撃機五、直延機四の編隊全機が、これに突入して、空母一、巡洋艦一、轟沈の戦果をあげた。

われらはそれぞれの進撃コースを航空図に書き込んで、進発した。

われらは兄神たちの生きた日とは違う日々生きて来た。日本の敗色は濃く、祖国は既に累卵の危うきにあった。

われらは最後の神風たらんと望んだ。考えられる限りの非合理に、人間的なもの一切をさわやかに侮辱して、吹きおこって来る救済の風なのだ。それこそは神風なのだ。

われらは絶望と情熱の二つに、それぞれ等分に住まねばならなかった。なぜなら特別攻撃隊とは、絶望が生んだ戦術であり、しかも訓練と死への決意に、絶望のひそむ余地はなかったからだ。

半年の間、われらはいかに巧みにいかに効率よく、いかに精密に死ぬかと言う訓練を受けていた。

ある日、二〇一空飛行長は、総員集合を命じて、こう言った。

『「神風特別攻撃隊の出撃を聞き召されて、軍令部総長に賜った御言葉を伝達する。』

『陛下は神国特別攻撃隊の奮戦を聞き召されて、次の御言葉を賜った。

「そのようにまでせねばならなかったか。しかしよくやった。≫』

そして厳かに続けた。

『この御言葉を拝して、拝謁するのは、畏れながら、我々はまだまだ宸襟をなやまし奉っているということである。ここに奮励して、大御心を安んじ奉らねばならぬ。』

われらは父神のような、死の恋の熱情の焰は持たぬ。

われらはもはや神秘を信じない。自ら神風となること、自ら神秘となることは、そういうことだ。

2

さてわれらは進発した。

編隊は敵の上空を乗り越えるため、数千メートルの高度へ登って行った。酸素吸入器から、口腔に冷ややかに感じられる酸素が流れ込んだ。これが最後の清らかな食事なのだ。

わが目標は一点のみ。敵空母のリフトだけ。機首を下げ、目標へ向かって突入するだけだ。そして、勇気とは、ただ、見ることだ。

空母は正しく、空母以外の何物でもない空母の実体になる。

見ることだ。

空母のリフト。あそこまでもうすぐ達する。

空母のリフトはなんと遠いことか。

そのリフトに人影が見える。

確実にあるのはリフトだけだ。それは存在する。それは見えるのだ。

そして、命中の瞬間を、ついに意識は知ることがなかった。」

川崎君はここで言葉を絶った。川崎君の蒼ざめてあえぐ苦し気な姿にはじめて気づいた。

七

ついで川崎君の口から放たれた声は、今しがたまでの凜然とした若若しい声とは、似ても似つかぬ声であった。

「かくてわれわれは死後、祖国の敗北を霊界からまざまざと眺めていた。

もし神風が吹くとすれば、兄神たちのあの蹶起の時と、われらのあの進撃の時と、二つの時しかなかった。そして、二度とも、神風はついに吹かなかった。

なぜだろう。

兄神たちはその死によって、天皇の軍隊の滅亡と軍人精神の死を体現した。われらは死によって、日本の滅亡と日本の精神の死を体現したのだ。われらが望んだ栄光のかわりに、われらは一つの終末として記憶された。

何故だろう。

なぜわれらは、この若さをもって、不吉な終末の神になったのだろう。

天皇制は列国の論議のうちに、危険な青空へ花冠をさしのべてゆらいでいた。

昭和二十年の晩秋、幣原首相は拝謁の際、陛下に次のようなお言葉を承った。

『昔、ある天皇が病気にかかれた。神であるお体に、医者ごときが触れるは恐れ多いと医者も呼ばず、薬もあげず、亡くなられた。とんでもないことではないか。』

この言葉によって、陛下は、民主主義日本の天皇たるには、神格化を是正せねばならぬと暗示されたのである。

陛下には静かに頷かれ、

『昭和二十一年の新春には一つそういう意味の詔勅にしたいものだ。』と仰せられた。

この『人間宣言』には、明らかに天皇御自信の御意志が含まれていた。

忠勇なる将兵が、神の下された開戦の詔勅によって死に、神の下された終戦の詔勅によって、一瞬に静まったわずか半年あとに、陛下は、

『実は朕は人間であった。』と仰せ出されたのである。われらが神なる天皇のために、身を弾丸となして敵艦に命中させたわずか一年あとに。

あの『なぜか』が徐々に分かって来た。陛下自身が、実は人間であったと仰せ出される以上、偽りのある筈はない。

あの暗い世に、老臣どものほかに友とてなく、一人で、辛苦を忍び、人間であらせられた。

すべて過ぎ越しことを『架空なる観念』と呼びなしたまうた日に始まった。

われらの死の不滅は潰された」

声はふるえて途切れたが、川崎君の肉体があちこちと小突き回される怖ろしい情景であった。木村先生は石笛で静めを試されたが静まる気配はなかった。

いくたびこの畳句がくりかえされたか、川崎君は手拍子を以て大合唱を追っていたが、追いきれなくなるに連れて、手拍子も乱れてきた。

木村先生が川崎君をゆすり起こそうとされて、その手にふれて、慌てて手を離された。何事かを予感した私どもは急ぎ川崎君の体を取り囲んだ。盲目の青年は死んでいた。

その死に顔が、川崎君の顔ではない、何者とも知れないと言おうか、何者かのあいまいな顔に変容しているのを見て、慄然としたのである。

2 舞台 時は戦前、戦後、場所は東京に展開する。

3 人物

私は、木村先生の帰神の会に列席した。木村先生の父は琴師を拝され、審神者たる翁自ら、石笛を吹き鳴らされる法を起こされた。

神主（霊媒）は、川崎重男は努めた。この二十三才の盲目の青年は、木村先生の審神者に応じて、従順に、清らかにその任を果たすことのできる人であった。

川崎君は、十八才の時、事故によって、両眼を失明したが、それ以来霊眼をひらかれ、木村先生の導きによって、眼前にありありと現れる霊象に開眼し、いわば第二の目を開いた人

である。

川崎君は、美少年といってもいい白い面たちに、細い眉、形の整った鼻筋、やさしい唇の持ち主である。

二・二六事件から語る。青年将校が、君則の奸を斬り、陛下の命令を待つ。御親政を以て民草を救ってほしいと訴える。

陛下は政務を取り、国の安泰を図ると言う。実際は、不本意、国体の精華を傷つけると言う。天皇に対する反逆の罪と断じ、はやばやと極刑に処した。

この時、皇軍は亡び、大義は崩れた。赤誠の士が叛徒となった日、軍閥は戦争への道をひらいた。

戦争に、特別攻撃隊として、空母に突撃した。勇気をもって死ぬことで天皇陛下と一体となる。

昭和二十年の晩秋、陛下は民主主義日本の天皇たるには、神格化を是正しなければならないと暗示した。

忠郎なる将兵が、神の下された開戦の詔勅によって死に、神の下された終戦の詔勅によって陛下は、

『実は朕は人間であった』と仰せ出された。

陛下は、神であるべきだった。それを二度とも逸した。もっとも神であらせられあるべき時に、人間にましましたのだ。

一度は、蹶起の時、一度はわれらの死のあと、国の敗れた跡の時である。

手拍子もかうかになり、声も小さくなった時、川崎君は仰向けに倒れ、動かなくなった。死んでいた。死に顔は川崎君の顔ではない。

帰神の会で、天皇が神であった時代と、人になった時代を霊媒者が語る。時代によって立場の変わる天皇を語る。一人の人が二重の体を生きることを語る重責が霊媒者にかかった。耐えきれず、死んだ。

死者は何も解決できない。死者の無念を思うと切ない。事情が分かっているからいっそうやりきれない。英霊の声を聞いて彼は死んだ。

資料を駆使して、人物を設定して、自説を展開した。非日常の帰神の会が描かれた。

結末に死をもってくることはよくあるが、ここは霊媒者の死で結ぶ。